

特集 上代古典における問題点

風土記における問題点

大 久 保 正

戦後における「風土記」の文献学的研究の長足の進展ぶりには、ただただ目を瞠るばかりと云うのが、「風土記」と本格的に取り組んだことの無いわたくしの正直な実感であった。平田俊春氏校訂の「校本肥前風土記」を核として諸家の研究を結集した「校本肥前風土記とその研究」の刊行（昭和二六）を皮切りとして、同じく田中卓氏校訂の「校訂出雲国風土記」及び「出雲国風土記諸本の研究」を核として第一線の学者の総力を結集した『出雲国風土記の研究』（昭和二八）、佐藤四信氏が独力で成し遂げた『豊後風土記の研究』（昭和三一）等の刊行に次いで、故秋本吉郎氏の校注に成る『日本古典文学大系本風土記』（昭和三三）、久松潜一氏が小野田光雄氏の協力を得て完成された『日本古典全書本風土記』（昭和三四・五）が刊行され、更に文字通り風土記研究に生涯を捧げられた故秋本氏の厩大な研究が遺著『風土記の研究』（昭和三八）として刊行せら

れたほか、植垣節也氏による『風土記漢字索引』の騰写刊行（昭和三六）が進められ、ここに風土記の文献学的研究はほとんど一応の完成に近づいたと言える。もちろん戦前からの学者の地味な努力の集積によるものではあるが、以上の如き達成がここ十数年の間に続々と刊行せられたのは正に風土記研究史上の偉観であったと言わなくてはならない。

しかし、以上のような風土記の文献学的達成の高さに較べて、風土記の文芸的もしくは文学史的な研究は果たしてそれに匹敵できるだけの進歩を遂げているであろうか。そこに風土記研究の最大の問題点があるように思われる。

折口信夫氏は風土記を古代生活の中の文芸として捉えるための指標を与えられた「風土記の古代生活」（昭和七、岩波講座『日本文学』の冒頭に「奈良朝時代の文献の中で、最異風なのは風土記であ

る」と記されたが、万葉集の神々の問題を考えるところからおずおずと風土記に近づいたわたくしなどにとっては、正しく風土記は異様な文獻として映じ、それを統一的に把握する文芸的視点を持ち得ないままに皮相的な資料として引用したに過ぎなかったが、その異様性こそ記紀・万葉だけからでは触れ得ない上代文芸の豊かさを暗示するものではあるまいか。わたくしは上述のような風土記の文獻的達成に脱帽すればする程、それが風土記の異様性と云うか、カオスと云うか、それが文獻学的解明によって片附いたような錯覚に陥ることを警戒しなくてはならないと思う。

『風土記』はもちろん文学作品ではないが、しかし文芸性を有することは何人も否定し得ないであろう。しかし風土記の文芸性とは何かと云うと解答は決して容易ではない。それは風土記の文芸的重層性と、その中にふくまれた矛盾に根ざすものであらう。この矛盾は風土記の歴史的形形成にその根本的契機を有すると考えられるが、それを風土記説話の構造と表現に即して具体的に掘り下げて行くために、風土記の「官命に基づく地誌」という制約によって実にはさまざまな困難な問題が横たわり、その事自体が風土記のもつ矛盾に根ざしていると言える。しかし、風土記の文芸性の解明は、この矛盾を避けて通るところには無く、この矛盾に正面から立ち向かう眼のみが、風土記の生活的・歴史的具體としての文芸性の実体を捉えることができるであらうと考える。周知のように風土記説話の把握において、これを古代地方人の生んだ物語と見なすことに根本的な疑いを挿み、「風土記の古伝の大多数は、書紀又は昔からあった旧辭から発展したものであり、然らざるものも多くは机上の製作であつて地方の伝説では無い」(『古事記日本書紀の研究』)として、「机

上の製作」と見る津田左右吉氏の見解と、地方民衆の生み出した民間伝承文学であることにその根本的性格を見出だし、記紀の神話伝説の如く合理化されない以前の説話形態に「生活の文学」としての価値を見ようとする見解とが鋭く対立している。鶴殿正元氏の『古風土記研究 常陸風土記』(昭和二九)は、後者の観点から「常陸風土記」を総合的に研究した戦後の労作として注目すべき業績であった。わたくしはこの線からする古代文学としての風土記の研究の進展を期待するものだが、ただ津田氏の提出した問題がすでに克服せられた解決済みの問題のように扱われるならば、それは上に触れた風土記の矛盾の構造の問題を避けているという点でやはり危惧を感じないではおられない。例えば風土記の伝承文学的側面を支える主体としての民衆という概念が従来は余りに曖昧であつたと思う。風土記に夥しい神々や天皇の巡幸伝説の基盤をなしたものが、古代の地方民衆の生活の中に生きていた民俗信仰としての「依り来る神」の信仰―遊幸思想に根柢をもつものであつたことは、堀一郎氏の労作『遊幸思想―国民思想の本質論』(昭和一九)によって明らかにせられた通りであるが、それが常陸においては倭武天皇、播磨においては品太天皇に集中し、固定化して行く過程は、漠然とした民衆の概念では説明できないものがある。これらに対して、出雲風土記がほとんど天皇や皇子の遊幸に関する説話をもち、所造^{ところぞう}天下大神として大穴持命の伝承が圧倒的であるのは明らかに^{くも}出雲國の特殊性にもとづくものと考えられる。しかし出雲のばいにして、その伝承を支えた主体を民衆の概念で律し去ることは平面的であり、非歴史的であることを免れない。その意味で、石母田正氏が、出雲風土記所収「国引き」の詞章の精密な具体的分析から始め

て、その文芸構造の特異性の基礎を複雑な出雲の歴史的過程に求められ、それが民間伝承の世界から自然発生的に生れるものではないことを論じられて、出雲の国造もしくは族長層に奉仕し隷属していた語部の存在を推定せられたのは、風土記の文学的究明に飛躍的な展望を齎らす問題提起であったと言ひ得る。しかし、その方法は「国引き」詞章という特異なケースを通じてはじめて成功したのであって、その方法を風土記の説話一般に適用して考えるわけには行かない。そこには官命に応じた各国の風土記述作者の姿勢にふくまれた文芸的態度との複雑な相関関係において、さまざまな困難な問題が横たわっている。しかるに最近『常陸風土記』について、その伝承を支えた主体を、犀利な歴史的眼孔をもって究明せられた、三谷栄一氏の「常陸風土記の成立と壬生氏―伝承文学の成立基盤をめぐって―」（『実践女子大学紀要』第八集）が発表せられた。この論文によつて、常陸風土記においてあの夥しいヤマトタケル伝承を生み出した基盤に、中臣氏の鹿島神宮支配に先立って鹿島神を奉戴した壬生氏の一大勢力があった事情が始めて明瞭となり、常陸風土記の説話伝承は歴史的具体的な厚みをもつて究明されるに至つたと言つてよい。吉野裕氏と益田勝美氏の協力に成る「風土記の世界」（『岩波講座日本文学史』）の示唆した研究の方向も、こうした実証的・歴史的な研究の積み重ねを通して真に具体化されることになるのである。風土記の文学性の全体的究明は文献学的研究が一応の完成を示した今後においてこそ期待される沃野であると思う。

——北海道大学助教授——

古 代 文 学 3

古事記撰録の過程について……………松田 章一

立つ論攷序説……………浅見 充孝

——水辺の諸形象を周つて——

共同研究 古代文学とは何か

市村 宏・伊原 昭・緒方 惟精・賀古 明

川口 常孝・戸谷 高明・倉塚 暉子・中西 進

宮城 謙一・山崎 正之・渡部 和雄・町方 和夫

万葉集卷十四の蒐集者……………江野沢淑子

常 処 女……………尾崎 暢殃

日本の外魂思想……………大久間喜一郎